
精霊使いのヒラナ

タ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊使いのヒラナ

【Nコード】

N76010

【作者名】

夕

【あらすじ】

記憶をなくした傷だらけの少年が、女二人に拾われる。比較的幸せな生活、穏やかな日常から、少年が精霊の問題、人間の問題を目の当たりにしたとき、どう行動するのか――答え、逃げる。厄介事から目をそらし、たくさんの人に頼る少年が成長するのかしないのかを見守る話。シリアス展開もありますが、適当に流し読んでくださると嬉しいです。

第一話 僕、拾われる（1）

体中が痛い。手や足を動かそうと思っても、少しだけしか動かせない。

周りを見ようにも、何も見えなかった。世界が暗い。息をするのも苦しい。なぜ、僕はこんなことになっているのか。

——分からない、思い出せない。僕は誰だ。

思い出せないことに苛立ち、唇をかむ。血の味がした。

僕から血が流れているのか？ それとも、今かんだことで唇が切れたのか？

血の匂いに、頭が混乱する。意識を持つことに疲れて、手放す。

そのとき頭上で女の声を聞いた気がしたが、もう僕には関係のないことだった。

＊

声がする。うるさい話し声だ。僕は静かに、このフカフカなところで寝ていたいのに。

「ねえ、こんなやつ助けちゃって大丈夫？ あたし、厄介事はきらい」

「私にとってはあんたの方が厄介事の種よ」

話しているのは二人か？ 僕のことを話しているらしい。それにしても、僕をこんなやつ呼ばわりするのは誰だ。

喋り方からして女っぽいが、もしかしたら特殊な趣味を持つ男かもしれない。……様子を見ることにして、女（仮）の話し声に聞き耳を立てる。

「そもそもこいつ人間？　瞳が赤かった、森の人かもしれない」

「この人は肌が白いもの。森の人なら褐色のはず。それに髪が黒いわ、黒は森の人には珍しい色よ。瞳が赤いのは人間にもいるでしょ」
「でも、体中傷だらけで死にそうだった！　もし犯罪者とかだったらどうするの」

「とりあえず助けただけよ、害があるなら元いた場所に置いてくればいいわ」

喧嘩腰で喋る女たち（仮）のおかげで、なんとなく自分の立場を理解することが出来た。

傷だらけで倒れていたのを、助けられたらしい。そして今は、これからの僕への対応を相談しているようだ。

たぶんこのフカフカな場所はベッドだろう。温かい。このまま眠ったふりをするのでは埒が明かないので、慎重に目を開けた。

「あら、起きたみたいよ。――大丈夫？」

僕にいち早く気づいたのは赤い髪の女だった。腰まである長い髪を三つ編みにして一つにまとめている。

それに続いて僕を見たのは、警戒心を隠そうともしない銀髪の女だ。美しい顔をしているが、なんとも性格の悪そうな女である。とりあえず両方とも女のようなので、僕としては一安心だった。

「あ、えーと、うん、大丈夫」

思っていたよりも小さな声で答えてしまった。自信がなさそうに見えたか？　いや、傷が治った後だし、こんなものか？

うまく話せない。なんとなく、自分が喋ることに抵抗があった。

「まったく、はっきりしない男ー。一言で言えばいいのに」

「あんたがはつきりしすぎなの。……ごめんなさい、起きたばかりなのに。なんで自分がここにいるのか分かる？」

赤毛の女は銀髪的女をいさめると、僕を心配そうに見つめた。

僕は首を横に振る。本当は知ってるけど、僕は寝たふりをしていたのだ。優しい赤毛の女性に、なんとなく罪悪感がこみあげた。

「三日前に、近くの川辺に倒れていたのよ。傷だらけでね、一応傷は治しておいたんだけど、まだどこか痛む？」

てことは、僕は三日間も寝ていたのか。手を動かし、痛みがないのを確認する。大丈夫そうだった。

「……痛くない」

「そう、良かった。……言いくいんだけど、髪を切らせてもらったわ。長すぎてね、治療がしにくかったの」

本当ごめんなさい、と彼女が謝るのを聞きながら、僕は自分の髪を触った。なんだか短い。

「仕方ないんだから謝んなくていいの！ それよりあんた、誰なの？ 名前は？ 森の人と人間、どっち？」

質問攻めだ。少しだけ考え、首を振った。

「分からない。僕、自分の名前すら思い出せないんだ」

それを聞いた二人は、ただ静かに眉を寄せた。

第一話 僕、拾われる（1）（後書き）

少年と女二人登場 ^ m ^
突発的に始めた話ですが、読んでいただけると嬉しいです。

第二話 僕、拾われる(2)

「だめ！ 絶対だめ！ 厄介なおいがぶんぶんする」

「放っておけないわ。せめて、彼が何かを思い出すまでは」

「何とも思いつかなかったらどうするの？ 記憶がないのだって嘘かもしれないし」

「あんなに傷だらけだったじゃない。それに私達を騙してどうするの？ 金なんかありやしないわよ」

「……まあ、それはそうだけど」

納得したのか、銀髪の女はため息をついた。

彼女たちは僕の記憶がないことに戸惑ったようだったが、すぐに議論を始めた。僕を元いた場所に置いてくるか、このまま保護するかについてだ。

僕としては置いてかれるのは困る。すごく困る。金もないし、頼りとなるあてもない。思い出せないし。

赤髪の女に、もっと頑張ってくれ！ と視線をおくる。それが届いたのか、赤髪の女はちらりとこちらを見た。

「あなたはどうしたい？ このままここにいて記憶が戻るのを待つか、ここから一番近い町に行くか。倒れていた場所に戻すなんてことはしないから安心してね」

……どっちがいいんだろう。正直置いてかれないのだったら、どっちでもいい。ああでも、町に行くとなると自分一人で全てをしないといけなくなるのか？ それは面倒くさいな。それならこのまま二人に保護された方が楽だ。金がないようなことを言っていたけど、まあ大丈夫そうだし。部屋を見渡しながら、普通の一般家庭だということを確認する。

このままここにいたい、というのは図々しいだろうか？

「ええと、どちらでもいいんだ。本当、傷も治してもらってるし」
自然と思ってもいないことを口に出した。心の中ではここで保護してください！ と土下座中であるというのに。

「謙虚な子ねえ……」驚いた様子の赤毛の女性に、銀髪の女はため息をつく。

とりあえず、誤解はされたようだった。図々しいことこの上ない僕に謙虚なんていう言葉がおくられるなんて思いもしなかった。記憶にない、もともとの僕も図々しい男だったのだろうか。それとも、今の僕とは全然違うのか？ まあ、どちらでも関係ないが。

「とりあえず人間のようなし、何日か一緒に暮らしましょうか。怪我が完全に治るくらいまで。それからもう一度考えればいいわ」

「――あ、うん」

当面の寝床ゲットー！ 心の中でガッツポーズしながら、ふと気付く。僕はどっちなんだろう。

人間と精霊。この世界には二つ種族がある。精霊とは、穏やかな気性を持つ善良の存在だ。自然のものが自我を持ち、特性にあった能力を使う。中でも力の強いものは人の形をとるが、翼があるので分かりやすい。どこに生息しているのか知られていないが、たしかに存在している種族だった。人間は精霊のように不思議な力はい使えない。人と人が協力し合い、どうしようもない時にだけ精霊の力を借りて生活していた。ただ、その人間の中に、森の人と呼ばれる存在がある。森の人とは動物の牙や爪をもち、凶暴で野蛮な性質。その多くが広大なアーレイの森で生活しており、赤い目に褐色の肌が特徴だ。そのため人間と同種ではないと言う者もいるので、三つの種族があると言う方が正確かもしれない。

僕は黒髪で赤い目。褐色でもない。黒髪は森の人には珍しく、人間の中には赤い目を持つ人もいる。人間の可能性が高いが、記憶のない僕としてはどちらとも言えなかった。ただ、動物の牙なんかはないので、人間なんだろう。そう結論付け、女性二人の方に目をやった。二人とも人間だろう。精霊は銀か金の色の髪をもつものが多いが、銀髪の女には精霊特有の神秘さが無い。どちらかといえば直情的なのだろう、柔らかなイメージはなく、はきはきと喋る人間だ。なんとなく、苦手だと感じる。赤髪の方は全然そうは感じないけど。

……………髪の色で呼び分けるって、面倒くさいな。

「あの、僕は何て呼べばいい？」唐突に聞いた僕に、二人は少し驚いたようだ。赤髪の方はすぐに名乗っていないことに気付いた。

「ああ、私はヒラナよ。ヒラナ・クレリヤ。クナの集落出身なの。

……………ほら、あんたも」

なかなか喋ろうとしない銀髪の女を小突き、ヒラナは言った。不満げな顔になり、銀髪はやっと口を開く。

「ジール・アシェンタ。出身は、ヒラナと一緒に」

二人とも人間のようにだ。精霊族も森の人も家名をもたないので、人間だと分かりやすい。

「じゃあ、あなたのことはなんて呼ぼうか」

なんとなくどきりとして、二人から視線を外す。名前なんてどうでもいい。覚えてないし。人に名前を呼ばれたくないし。

嫌な汗がでそうになったとき、ジールが急に「あ」と声をあげた。

「そういや、首になんか書いてあった。あたしは読めなかったけど、ヒラナなら読めるかも」

ヒラナが僕の首に顔を近づけ、目を細める。そしておもむろに僕

から離れると机に置いてあった眼鏡を手にとった。案外、目が悪いようだ。眼鏡をかけ、もう一度僕の首に顔を近づけるヒラナに、僕は心臓が痛くなった。彼女の顔が首の近くということは、顔にも近いということだ。気恥ずかしい時間が流れ、ヒラナはそっと口を開く。

「せ……セイ、かなあ。たぶんだけど。まあ、それでいいかなにが？」と僕が問う前に、ヒラナは楽しそうにほほ笑む。

「よろしくね、セイ。ここが今日から君の家だ」

第二話 僕、拾われる(2) (後書き)

とりあえず名前だけでも（・ω・）
なんだろ…主人公の性格、間違えたかもしれません↑

第三話 僕、人間と話す(1)

ふんふーんと楽しそうに鼻歌を歌いながら、ヒラナが僕の部屋に入ってきた。

「傷はまだ痛む？ そろそろ効いてくると思うんだけど……」

「大丈夫。もう全然痛くないんだ」

答えると、ヒラナは安心したように微笑した。

僕がヒラナ達と住んで三日が経った。ヒラナとジールは二人で暮らしていたので、僕は余った部屋をもらった。

その三日の間に二人とはなんとなく馴染んだのである。食事はヒラナが運んでくれるので、思った通り僕は何をすることもなく暇を持て余しながら過ごせたのだ。

「もうすぐ友人が来るの、セイにも会って欲しい。この集落に住んでいるし、なにかあったら助けてくれるわ、きっと」

……なんとなく、その友人と会いたくないと思ってしまった。正直、誰とも会いたくない。ヒラナやジールだけで充分だ。

「うん、どんな人？」

口は勝手だ、思ってもないことをしゃべる。ヒラナは僕が友人と会いたくないと思っているなんて、思いもしないだろう。

「んー、言葉の選択がへたな人って感じね。ジールに似ているわ」苦笑しながら言うヒラナに、僕は眉をよせる。余計嫌だ、ジールに似ているなんて。直情的なジールは、思ったことをすぐに口にする。もっと遠まわしに言ってくれ、と何度僕が思ったことか。

遠くでドアがノックされた音がしたので、僕はさらに気分を害した。ヒラナの友人が来たようだ。仕方なしにヒラナの後を追い、自室から出る。ヒラナが返事をする、と遠慮なく玄関から友人が入っ

てきた。

——まさかの、男の友人である。

*

入ってきた男は偉く整った顔をしていた。つり目がちで、顎は鋭い。肩にかからない程度の茶髪を額の真ん中でわけていた。

彼はすぐに僕を見つけたようで、新参者である僕をぶしつけに眺めると不機嫌そうな顔になり、

「男か」……僕が思ったことと同じようなことを呟く。

「キース・アージタよ。学生時代からの友人なの」

ヒラナが紹介し、僕と彼は初めて目があつた。いや、睨まれたと言った方が正確か。それくらい、彼の目は鋭かった。

「よろしく。僕はセイだ」

「ああ、俺のことはキースとでも呼んでくれ。……本当に記憶がないのか？」

キースは怪しむように僕を見るので、自然と背筋がピンとはった。

「本当本当。あ、ジール水汲んできてくれない？　夜になってからじゃ危ないから」

今は夕方で、空は赤い。それに気付いたのか、ジールは嫌な顔もせずヒラナに返事をして外に出た。水を汲みに外に行くのか？　不思議に思ったが、聞くほどのことでもないと思い、ちらりとキースを見た。彼から痛いほどの視線を感じる。

なに。僕、嫌われてんの？

睨み返せずに、そっと視線をそらす。気まずい。ほんと気まずい。ヒラナに助けを求めようとしたが、彼女は楽しそうに料理を作っ

いた。

ヒラナとジールの家には、四つの部屋がある。まず玄関から入ってすぐにダイニングキッチンがあり、そこから右のドアを開くとヒラナの部屋で左のドアを開くとジールの部屋だ。僕の部屋はジールの隣にあり、昔は物置として使われていたらしい。風呂場とトイレは、家の近くの小屋にある。

三日住んで分かったのは、料理と掃除はヒラナの担当だということだけ。ダイニングキッチンで忙しそうに動き回っているヒラナに、僕とジールは時々その手伝いをする程度だった。

ただ彼女の料理はおいしかった。初めて食べたときはびっくりしすぎて二人に笑われたくらいで、これから彼女の料理が食べられるのかと、自然と口元がゆるむ。

「ヒラナ、何か手伝うことはあるか」

僕が言う前に、キースが申し出た。ヒラナは少し考えると、首を振る。料理はもう少しでできるようで、後は仕上げだけらしい。ちようど良くお腹が減ってきた。早く夜ご飯食べたい。

「……そういえばレリオルは呼んでないのか？　もう来ているかと思っていたんだが」

「ああ、レリオルは忙しいみたい。ほら、もうすぐ精霊祭があるでしょう、その準備でね」

「もうそんな時期か」キースは驚いたのか、目を丸くした。そうしてすぐに、考えるように黙り込む。

——僕の入るすぎがない。二人は本当に友人のようだった。表面上だけの付き合いだったなら僕も会話に入れるが、この二人の間には入れない。思わず眉を曇らせてしまった。

安住の地をなくしてしまったように、なんとなく不安になってくる。

キースはたぶん僕のことを好ましく思っていないのだから、僕をこの家から追い出そうとするかもしれない。

それは辛いことだった。ここでの生活に慣れてしまったし、どこか安らぎも感じていた。

記憶がないことさえ、不安に思うこともなかったのに。

僕がそう悩んでいる間も、二人は話しこんでいる。はやくジールが帰ってくればいいのに。そうすれば、僕もこの空気に馴染めるかもしれない。

「でーきたっ」

背を向けていたヒラナが振り向く。彼女の手には普段よりも豪華でおいしそうな料理がある。

彼女は嬉しそうに笑った。

「今日はセイの歓迎会よ。いっぱい食べてね」

花のように笑うヒラナに対して、僕は驚いて――涙が出そうになるのを必死でこらえた。

第三話 僕、人間と話す（1）（後書き）

いきなり話飛んすみません（；ω；、）

第四話 僕、人間と話す(2)

「歓迎会って、僕の……？」

信じられずに、思わずそう聞いてしまう。ヒラナは肯定し、テーブルにどんどん料理を置いていった。心なしかキースの目も優しくなった気がする。彼と視線が合ったのでにっこりと笑いかけると、キースは眉をしかめて視線をそらした。

……何はともあれ、僕の歓迎会である。正直言っすっげー嬉しい。椅子に座り、料理を眺める。よだれが出てきそうだった。

「ただいまー。ヒラナ、水はこのくらいで大丈夫？」

ちようどジールが帰ってきた。手には水がなみなみと入っている大きな瓶を二つも抱えている。

「おかえり。うん、それぐらいで充分よ。ありがとう」

ジールはテーブルの横に瓶を置くと、テーブルの上の料理に目を輝かせた。

「さっすがヒラナ！ ほら、もう食べよう。お腹すいたんだあ、あたし」

彼女は僕の隣に座る。キースもヒラナも苦笑しながら向かいに座った。僕も食べるのは大賛成である。てか早く食べたい。

「セイとの出会いを祝って。カンパニー！」

ジールの声で、四人がグラスを手に取り乾杯する。僕のグラスには果物の果汁が入っていた。果物はとても高価なものだ。少しばかり緊張しながら、一口飲む。酸味が強いが、さらりと喉に流れた。おいしい。

ヒラナ達は一般家庭だと思っていたが、たぶんそれなりに金持ちなんだろうと想像できた。食事も一日に三度出るし、毎日お風呂にも入れる。調度品だってきれいなものばかりだった。

そんなことを考えながら、もう一度グラスに口をつける。隣のジールのグラスには酒が入っていたようで、やけに騒ぎながら飲み食いしていた。負けられない、とばかりに僕も鶏肉をフォークで取る。そのまま口に入れると、自然と笑顔になった。やっぱりおいしい。もう一度それを食べてから、他のものにも手を付ける。

ヒラナの料理は基本的に大皿にいれられる。そこから自分が好きなだけ小皿にとり分けるのだ。いかにも親しい間柄って感じで、それが少し嬉しかったりする。

「今年の精霊祭って、何をするんだろうな」

品良く食べていたキースが、思い出したように言った。ヒラナが少し考え、諦めたように顔を横に振る。

「さあ、そればかりはレリオルも教えてくれないし……」

話しているキースとヒラナをしり目に、ジールに話しかける。「レリオルってだれ？」

「あー、ヒラナの親友。今年の精霊祭を取り仕切ってるんだよ」

ふーんと返事をして、精霊祭のことを思い浮かべた。精霊祭とは、普段力を貸してもらっている精霊に、感謝のしるしとして祭りを行うことだ。精霊と人間が一緒になって、遊び騒ぐ。べつに人間が何をするってことじゃない——はずだ。

精霊祭のことは知識として知ってるが、あいにくとそれに参加した記憶がない。だから、あまりわくわくとした気分になれないし、精霊祭でやることに確信が持てないのだ。

それでも、知識が残ってくれて良かった。記憶がないので不安だし、知識に確証はもてないが、それでもフォークの使い方とか知らなかったら本当に僕は死んでしまうところだった。

知識がないことは、生き方を知らないことと一緒にだ。食べ方も、使い方も、知らなければ意味がない。

とりあえず今はヒラナやジールがいるから、別にどうでもいいが。てか、知らなくてもヒラナなら一から教えてくれそうだ。僕と同じくらいか、少し年上くらいに見えるのに、しっかりしているなあと他人事のように考える。

飲み食いしていたら、ついにグラスの中のジュースが底をついた。ヒラナにおかわりを頼もうとしたが、その前にキースに話しかけられる。

「お前は、長様に挨拶しないのか」

非難めいたキースの視線に、僕の頭の中が一瞬真っ白になった。

え、僕、誰かに挨拶しに行かなきゃいけないの？ しかも長様って。何、偉い人？

ちらりとヒラナ見ると、彼女は苦笑しているようだった。

「んー、そうね。もうそろそろ行こうと思ってたのよ」

「そんなことが許されるか。三日も無断でここにいたんだろう、明日にでも行くべきだ」

行ーきーたーくーなーいー。ほんっと最悪。なんてこと言うんだよ、キース！

思いつく限りの悪言を彼に吐く。ただし、心の中で、だ。居候の僕がそんなこと言っちゃいけない、と自分を抑えながらも、無意識にむくれた。

僕は今の生活に満足してる。ヒラナとジールの三人暮らしで、時折手伝いをする。おいしい料理に、たわいない彼女たちとの会話。その全てに、僕は安らぎを感じていた。

……まあ、もうすぐしたら出ていかなんといけなくないかもしれないが、それはまだ少し先の話だ。今はこの日常を大事にしたかった。誰かがこの日常に入ってくるのは、僕にとってとても嫌なことなのだ。それに、このままここにいれるかもしれないし。

無言を通す僕を、ジールがちらりと横目で見た。その視線がとも真っ直ぐなので、まるで僕の心の中を見透かされたように感じ、顔が赤くなる。なんだか恥ずかしかった。自分の嫌な部分を見られた気がした。

うつむきそうになるのを必死で我慢して、意を決して言った。

「僕、行くよ。明日……」だんだんと声が小さくなっていく僕を、情けなく感じる。

それでも、自分は決して長様に会いたくないなんて思っていない、そう虚勢をはりながらジールを見た。今は、今だけは、本当の僕を知られてはいけない。大切な時間を、僕は守らなければいけない。

横目で見たヒラナが驚きながらも嬉しそうな顔をしたので、僕は無性に泣きたくなった。

第四話 僕、人間と話す（2）（後書き）

弱い主人公ですいません（汗）

第五話 僕、人間と話す（3）

僕の歓迎会は、ジールが酒に酔って大暴れするまで続いた。その頃には夜も更け、からになった大皿が目立っていたのだが。

キースは僕が長様の前で恥をかかないよう、話し方、礼儀なんかを何かにつけて話していたが、悪酔いしたジールに酒を飲まされ出来あがってしまったので、今はダイニングキッチンで寝ている。

ヒラナもジールも、まだ、寝ている。

ため息をつき、服の準備をした。キースが持ってきてくれた礼服をハンガーにかけ、皺にならないようにする。

今は朝だ。誰も目覚めていない朝。それが過ぎたら昼になり、僕はここから出て、長様に挨拶に行く。

——すっげーやだ。なんで僕がそんなことしなくちゃいけないんだ。

適当にここで生活したい。迷惑なんてかけない。だからもう本当、偉い人に会いたくない。

だってここから出ると言われたらどうする。言い返せない。だからといって、一人で生活することなんてできない。たぶんヒラナは僕を一人にさせないだろうが、それにも限度がある。……とりあえず、偉い人には気に入られよう。ずっと笑顔、適当な受け答え、あと、あとはどうすればいいんだろう。

そもそも適当な受け答えが、僕に出来るか？ 君は誰ですかなんて言われたって、知らないとか答えるしかないというのに。

ヒラナやジールは、一緒について来てくれるのだろうか。それだったら、彼女たちに任せてしまいたい。ああでも、無愛想な印象になってもだめだな。

僕はもう一度、ため息をついた。

*

「さ、準備はできた？」

ヒラナが確認を取ったので、僕は頷く。

気乗りしない。身に付けた礼服が、僕を拘束でもしているように感じ、気分が悪かった。

「ほらほら、早く！ 約束の時間までもう少しなんだから」

ジールに背中を押され、嫌々ながらもヒラナの後について、家を出た。

ヒラナに家の周りには小屋以外に何もない。周りには手入れのされていない草原だけがひろがる。ただ、少し北に足をのぼすと森がある。森の人が住む、アーレイの森だ。長様の住む家はアーレイの森の反対、南へ進む……らしい。どちらも行ったことがないので、分からないが。

ヒラナはやはりまっすぐに南へと進んでいった。僕も少しだけ急ぎながら、彼女の後をついて行く。ジールは来ないらしい。まあ、ヒラナがいてくれるだけでも十分安心できるからいいんだが。振り返って家の方を見ると、送り出してくれていたはずの彼女は家の中に戻ったようだ。

どれぐらい時間がかかるんだろう。僕の服装はおかしくないかな、ああ、キースが見立ててくれたんだから大丈夫か。そういえばキースはどこに行ったんだろう。昼ご飯を食べようとダイニングキッチンにいくと、寝ていたはずの彼はいなかった。ヒラナに聞いても「分からない」としか言わなかったし。

「――わっ！」

足が何かにつまづく。前に倒れそうになる僕は、痛みを予想して目を力いっぱい閉じた。やばい。痛い――痛くない。

一瞬だったが、ふわりと、僕を何かが優しく支えてくれた気がした。そのまま僕は尻もちをつく。

「大丈夫?! セイ……ああ、絡み蔦ね」

ヒラナが僕に駆け寄ってきて、肩に手をおく。僕の足元を見て、ヒラナは心配そうな顔をした。

「あ、大丈夫。考え事してたから、ちょっとつまずいただけ」

僕も足元を見る。小さな草の葉が、絡むように輪を作っていた。絡み蔦だ。これに足が引っ掛かったんだな。全く、絡み蔦はこれだから厄介だ。むっとしながらも、絡み蔦を地面から引っかく。

「え、抜いちゃうの? どうするの、それ」

ヒラナが驚いた。どうするのって、やることは一つしかない。こんな貴重品、持って帰らなければ損だ。ポケットに絡み蔦を丁寧にいれながら、彼女に答えた。

「だって、ほら、絡み蔦の根は万能薬じゃないか。薬にしないと」「薬にできるの?!」

さらに驚いたようなヒラナに、僕は呆気にとられる。一般常識だと思っていたが——違うのか?

「うん、根を搗って、粉末にするんだ。使うときは水に溶かして飲んだり、傷口につけたりする。主に痛み止めとして使うんだけど、カラ豆と一緒に使えば……」

そこまで言って、ヒラナの視線に気付く。咄然とした彼女に、僕は頭を抱えたくなった。喋りすぎた! 薬のことなんか、今はどうでもいいだろうに。

「——ごめん」

なんとなく、謝る。恥ずかしい。本当恥ずかしい。耳が赤くなってきたのが分かる。うわあ、もう、なんて言えбайいんだろう。やっぱり僕はあんまり喋らないほうがいい。

「あら、謝らなくていいわ。それにしても、絡み蔦は薬になるのね。知らなかった」

珍しそうに絡み蔦を見ながら、ヒラナはほほ笑む。

「セイは物知りね。薬作るのが、手伝ってもいい？」

彼女があまりに自然に聞くものだから、僕は思わず頷いた。作り方は知っている。でも……、でも、僕はうまく作れるのだろうか。

ヒラナは満足そうに頷くと、僕に手を差し伸べた。

「ほら、立ち上がって。もうすぐ長様の家よ、急がなくなっちゃ」

恐る恐る、彼女の手を取る。握る。握り返される。

「うん」返事をして、僕は立ち上がる。尻も痛くないし、怪我もないようだ。

手を放し、歩きだしたヒラナの後ろをついていく。心なしか、先ほどよりも足取りがかかるく感じられた。

そして、さっきの支えられた感覚はなんだったんだろうと、心の隅で考えた。

第五話 僕、人間と話す（3）（後書き）

草でこける主人公です↑

第六話 僕、人間と話す（4）

家が見えてくる。暖色の屋根の家が、たくさん見えてくる。

「集落に着いたわ、長様の家はもうすぐよ」

……ヒラナの声に、僕は答えられなかった。

人がいる。彼女の家の周りからは想像もつかないぐらい、僕が目に見えるのは人ばかりだ。

ヒラナの隣を、ぴったりとくつつくように歩く。怖い、怖い、どうしよう。

周りにはたくさんの人がある。店もあれば家もある。ヒラナの家
の周りとは大違いだ。

吐きそうになる僕に、集落の人は気楽に挨拶してくる。一応愛想
良く返すが、心の中ではびびりまくりだ。なんで怖いのか、僕にも
分からない。ただ、自分に向けられる顔が、声が、どうしようもな
く怖いのだ。

ヒラナとジールは良かった。助けられていると分かった。助けて
もらえると心の底から思えた。キースも、あのヒラナの友人なのだ
から悪い人ではないと考えられた。

しかしこの大勢の人はどうだ。何を考えているのか、分かったも
んじゃない。

「驚いたでしょう。ガマの集落の中心なのよ、ここは。長様がいる
場所だから、人もたくさん集まってくる。治安も悪い方じゃないわ。
とても住みやすいし、素晴らしい場所よ」

きよろきよろと周りを見ていた僕が驚いていると思ったのか、ヒ
ラナはどこか誇らしげに説明した。

そうか、ここはガマの集落というのか。長様というのは、たぶん
ガマの集落で一番偉い人なんだろう。そう勝手に解釈しながらも、

疑問に思った。こんなにたくさん人がいる場所があるのに、なぜヒラナはあんなさびしい場所に住んでいるんだろう。まあ別に、僕としては嬉しい限りだから良いんだけど。

「ほら、あれが長様の家よ。ああでも、まだ時間には早いわね。どうする？　どこか店にでも入ろうか？」

ヒラナの指の差す方を見ると、品の良い豪邸があった。庭には赤色を基調としたたくさんの花が咲き誇っている。門の前には二人の人がいた。門番だろうか？　――あ、やばい。緊張してきた。急いで首をふる。「いや、待たせてもらおうよ。早すぎるってほどでもないし」

「じゃあ、そうしよっか。もし遅れたりしたらいけないしね」

ゆっくりしたペースで、彼女は歩みをすすめる。そんなヒラナに、僕はほっとした。長様に会うよりも、店に入る方が怖い。偉い人も怖いけど、たくさんの人に会う方が、僕にとっては怖かった。

ヒラナが門番に話しかける。門番はやけに興奮した様子で、門を開けた。ヒラナが僕の歩調に合わせて、ゆっくりと門をくぐった。その後ろを、僕もついていく。

＊

「よく来たな、ヒラナ。それと……セイ、だったか？」

低い、かすれた声が広い部屋の中に響いた。

長様の屋敷に入った後、召使いのような人に長様のいる部屋に案内された。緊張しながら通された部屋の中へ入ると、このしわがれた声で出迎えられたのだ。

見ると、声の主は顔に深い皺をきざんでいる老人だった。白く長い髪を後ろでひとつにまとめ、口に立派な白ひげを生やしている。そこまで見て、僕は老人の隣に視線を移した。――彼だ、キースが

いる。

いないと思ったら、ここにいたのか。いや、そうじゃない。なんで彼がここにいるんだ。キースは涼しげな顔で、こちらを見ていた。

「ええ、彼はセイです。……お久しぶりです、長」

「うむ。元気そうで何よりだ。そういえば、そなたの弟はどうしている？ 活躍はよく耳にしているが」

「今はナトの集落で傭兵として働いているようです。全く、心配ばかりかける弟で」

あーもう！ ここにジールがいてほしい。

そうすればこの会話に入っていけるかもしれないのに。てか、ヒラナには弟がいたのか？ 知らなかった。それにしても、長様はやっぱり老人だったんだな。まあそりゃ、年取らないとなれないか。ぐるぐると余計なことばかり考えてしまう。

挨拶に来たのに、それすらしてない。話しかけられない。話しかけられない。

キースをちらりと見てみたが、彼はヒラナの方ばかり見ていた。

ああ、本当に僕は何をすればいいんだろう。

ヒラナと長様は二人で和やかに談笑中だ。……僕、あんなに緊張して馬鹿みたいだな。まるで空気だ。それぐらい僕には存在感がない。

部屋の中を眺めていく。庭と同じく、家具も赤い色が多かった。

ただ、室内の色は花のように明るい赤ではなく、黒みを帯びた赤だ。長様は赤が好きなのだろうか。そっと横を見る。メイドがすぐそばに控えている。見張っているのか？ 僕は何もしないのに。あ、キースが動いた。

「長、そろそろ彼のことを……」

控え目に意見するキースに、僕は喜びと緊張という複雑な心持ちになる。やっと僕にかまってもらえたのは大変喜ばしいことだが、僕はこれから何をしゃべればいいんだと頭の中でいろんな言葉が浮かんでは消える。

「そうだな。ヒラナ、説明を」

緊張する僕に対して、長はいかにも面倒臭そうに言った。しかも僕は喋らなくていいようだ。嬉しい、と思ってもいいのだろうか？まあ、なるようになれだ。言われた通り、ヒラナに任せる。ただ、念のために背筋を伸ばし、ほほ笑んでみせた。

「四日前の夕方、アーレイの森付近の川で傷だらけの彼を保護しました。骨は折れていませんでしたが、右腕と左のふくらはぎを打撲していたので、精霊の力を借りて治療をしました。記憶がないようですが、普段の生活に問題はありません。記憶が戻るまではこの集落で生活させたいと思いますが、どうでしょうか」

淡々とヒラナが報告する。

「……許す」

どうでもいいことのように、長様は言った。

「セイ、すまないが先に帰ってもらえないか。ヒラナと話がしたい」
「あ、はい」

唐突に彼が言うので、僕は呆けたように返事を返す。

「キース、彼を送ってくれ。まだ慣れていないだろうから」
「――分かりました」

そうして、つつがなく長様との挨拶は終わった。僕が何もしないままで。

ヒラナは変わらず穏やかな笑みを浮かべ、僕を見ている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7601o/>

精霊使いのヒラナ

2011年10月8日02時34分発行